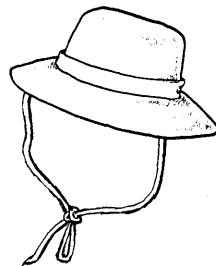


ある実践研究発表会

松井 とし



K幼稚園は住宅街の中にある幼稚園。隣接した市立小学校の附属幼稚園で、五歳児のみ二クラスの家庭的な園である。その幼稚園で、二年間にわたる実践研究の成果を発表する研究会が開かれた。

午前中の公開保育の時間、子どもたちはそれぞれに自分のやりたいことに取り組み、いつもと変わらない生活ぶりをみせてくれた。私も園庭の柳の小枝でクリスマスのリースを作ったりして保育参加、久しぶりに子どもたちと過ごす時を楽しんだ。先生方も子どもたちも自然体で、参会の人たちと交わることのできる機会を楽しんでいるように思われた。

午後の研究会では、「豊かに育ち合う子どもの育成をめざして——人とかかわる力を育てる」という研究主題に即して、子どもたちのエピソードを中心にまとめられた「友だ

ちっていいな」という提案発表がなされた。その中で、『私たちは、子どもたちのトラブルを大切にしています。なぜなら私たちに考える機会を与えてくれるからです』とさりげなく話されたことは、先生方の保育に取り組む姿勢を表している印象的であった。

続いて二つのグループに分かれて分科会形式の討議がもたれた。テーマは「幼児理解について」と「環境について」。司会者の話しやすい雰囲気作りにリードされるように、参加者はそれぞれ自分の事例を語り出し、テーマについていろいろな角度からのアプローチがなされた。再び全員が遊戯室に集い、記録者から分科会での話し合いの要旨が報告された。この時の優れたまとめによって、研究会全体が高まったように感じられた。

保育の日常の小さな出来事を流さず、話し合い、考え合う園内研修。その積み重ねを主題に沿って整理し、提案する。園の先生方はこの研究経過を振り返り、『楽しかった』と言う。一方参加した人たちは、小さなグループの「膝を突き合わせるようなかわり合い」の中で保育の日常を、そして自分自身を顧みる。話すことによる、浄化されるような体験が『研究会に来て良かった』という感想になったのだろうか。

教育要領が変わり、保育が変わり、研究発表会のあり方も変わる。やらされてする受身的な研究や研究のための研究とはひと味違う実践の研究、手ごたえのある研究会であった。

(元・幼稚園教諭)